5 伝統を誇る持続可能な稲作文化

○悠紀斎田（ゆきさいでん）の御田植

◆斎田の勅定

昭和3年1月、昭和天皇即位の大礼と大嘗祭（だいじょうさい）が11月に京都で挙行されることが告示されました。大嘗祭とは、天皇が即位した年の新穀を天神地祇に供え、神々とともに天皇自身も共食をし、即位の報告をする天皇一代の最も重い祭儀です。

その祭儀に使われる米を作る田を、悠紀斎田、主基（すき）斎田と呼び、悠紀地方は京都から見て東日本、主基地方は西日本から選ばれるのが習わしでした。２月５日、悠紀地方として滋賀県が選ばれました。当時の滋賀県知事今村正美は、「即日県下に告諭を発してひろく全県民にその光栄を周知させ、また責任の重大さを自覚させるとともに、（※１）」急ぎ東上し、明治神宮などを参拝して無事大命が果たせるよう祈願し、県民は大いに喜びに沸いたようです。

※引用1 『滋賀県史 昭和編 第3巻農林編』p.39

◆御田植神事

3月15日に、県内39か所の候補地から、最終的に当時の野洲郡三上村（みかみむら）が選ばれました。

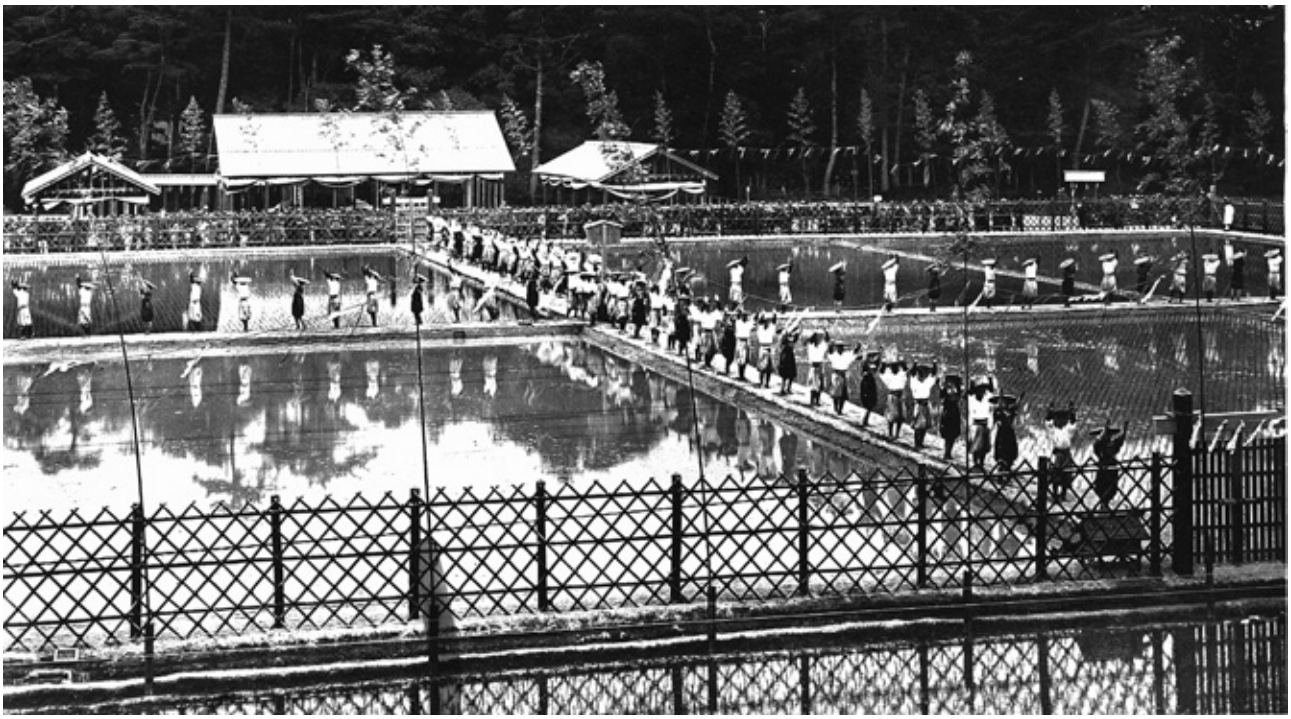
その後、準備が急ぎ進められ、4月9日に斎田の耕作に従事する奉耕手100名を選抜し、4月11日の鍬入れ式をもって、苗代をつくり始めました。5月8、9日には、三上村全村民に予防注射をするなど万全の体制を敷き、6月1～3日に各界代表ら900余名の来賓が参列する中、盛大な祭儀と祝典を伴う御田植祭が挙行されました。3日間の拝観者は約14万人にもなりました。

◆京都御所への納入

稲は順調に生育し、9月16日には厳粛に抜穂式（ぬきほしき）が執り行われ、拝観者は97,500人を数えました。その後、乾燥・調製（精白・布磨・粒選・清磨）を経て、10月16日に野洲駅から京都駅まで、新造の列車車両で運送された後、徒歩で京都駅から京都御所まで運ばれて、納入式を終えました。

なお、三上村の米だけではなく、当時の県の農産物を代表する最良の品々が、最良の産地から献納されました。

▲悠紀斎田奉耕手（野洲市）[『大嘗祭悠紀斎田記録帖』より転載]



▲御田植踊（野洲市）[『大嘗祭悠紀斎田記録帖』]より転載]

◆近江の水田由緒

滋賀県（近江国）は、「過去において遠く、一千有余年の昔、仁明天皇の御即位以来、四十数回にわたって悠紀地方に選ばれる名誉を担って(※2)」きました。

滋賀県は、水利の制御が古来より容易であり、古くから発展した国内有数の稲作文化があり、米の品質、生産力ともに全国随一の大農業地帯であったことから、悠紀斎田の地に選ばれ続けてきました。優れた地域社会の仕組みと一体となって、今日まで稲作が継承されています。世界的に見ても、千年以上に渡って、同じ場所で同じ農業が持続することはとても貴重なものです。この持続可能な稲作文化を、未来に継承し続けていかなければなりません。

※引用2 『滋賀県史 昭和編 第3巻農林編』p.38,

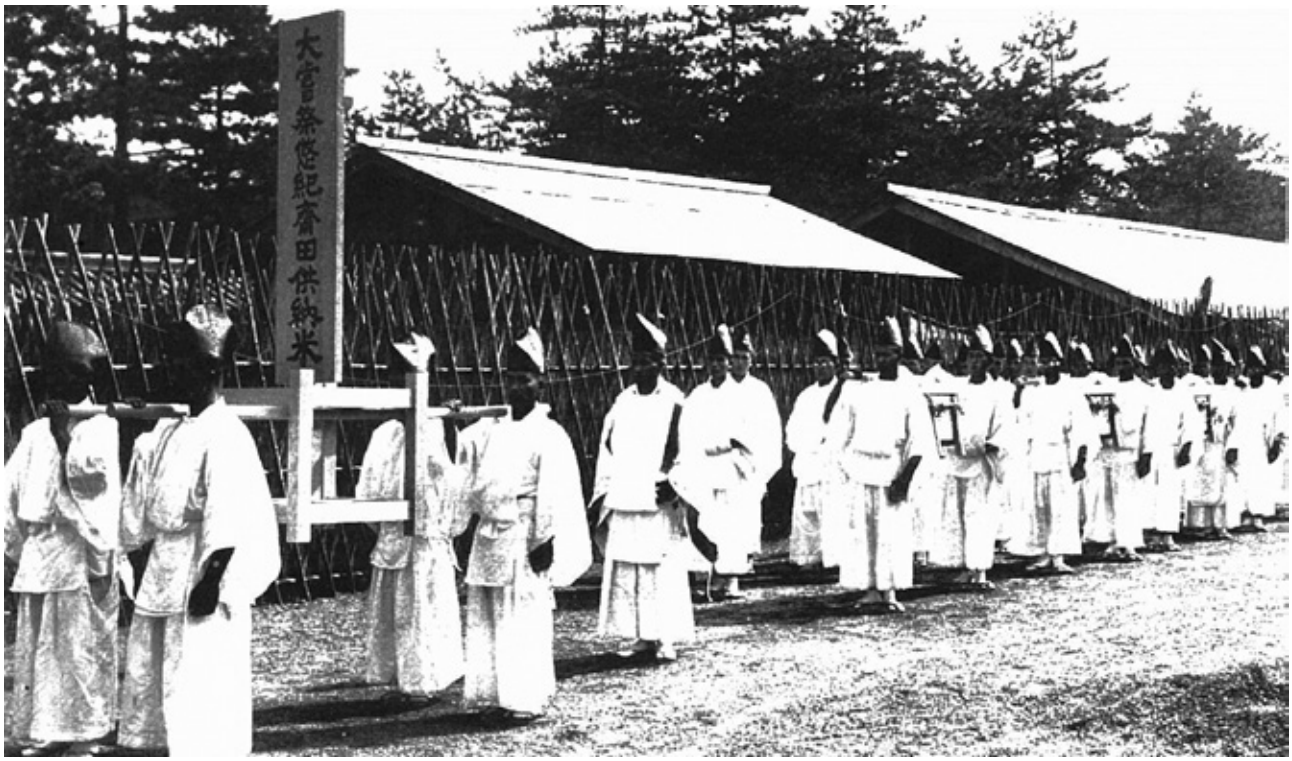
（参考）

滋賀県史編さん委員会編（1976）『滋賀県史昭和編 第3巻農林編』p.38-43, 滋賀県

野洲町編（1987）『野洲町史 第2巻 通史編』p.529-537, 野洲町

▲絹磨作業［『大嘗祭悠紀斎田記録帖』］より転載］

▲粒選作業［『大嘗祭悠紀斎田記録帖』］より転載］



▲大宮御所前行進［『大嘗祭悠紀斎田記録帖』］より転載］

○雨乞い信仰と郷祭

◆荘園の開発と衰退

私たち日本人は、水田での稲作を中心に農耕文化を育んできました。古来より水との関わりが強かったため、水にまつわる信仰や祭りが各地に根付いています。この章では、県内の信仰について、「雨乞い」「郷祭」に着目します。なお、湖北地方の信仰については、後段「湖北の農事文化」で紹介します。

▲黒川の太鼓踊り（甲賀市）
［『滋賀文化のススメ』より転載］

◆雨乞い信仰

雨乞いの起こり

四方を山々に囲まれた近江の農民は、稲作伝来以降、用水を不足なく入手することに常に苦心してきました。山地からの水は、当時の持てる技術に合わせて、極限まで合理的な配分によって、農耕に利用してきました。それでも夏の干ばつ時など、あらゆる手段を尽くしても水が不足する場合は、運を天に任せ、神頼みをするほかありませんでした。

『日本の雨乞いの起源は、扶桑略記によると、推古帝三十三年（625）に高麗の僧に命じて官営の雨乞いが行われた（※1）』といわれています。しかし、そもそも雨乞いは、民間習俗の自然発生的なものであり、『現実には相当昔から土着の自然発生的な雨乞いが行われていたはず（※1）』とする説もあり、起源について確証の持てる記録は、あまりありません。

※引用1 『鈴鹿山地の雨乞―湖東・養老をふくめて―』 p.10

水利技術が発展し、より多く水が入手できるようになっても、多くの時代には農地の開拓も同時に進められたため、結局、水不足が完全に解消されることはありませんでした。そのため、農民たちの雨乞い信仰が定着することになったのです。

雨乞いの事例

県内の雨乞い習俗について、湖東を例に見ていきます。

永源寺町南部の愛知川筋神崎川源流には雨乞山があり、山名にも雨乞いの願いがこめられています。

『永源寺町の人たちは雨乞山に登り、山上の池に雨ごいの神酒を供えたという。ところがある年、神酒ではいっこうに効きめがない。そこで腰巻や蛇、はては人骨までも池に投げこんだら、やっと祈願がかなったそうだ。（※2）』

※引用2 『琵琶湖流域を読む 下―多様な河川世界へのガイドブック―』 p.224

また、愛知川町長野集落には、大旱魃のときに行った雨乞い祭について、次のような記録があります。

『昭和9年には（中略）30～40人が夕方から（中略）提灯を16個ともし、小太鼓、鉦2丁を担いで大瀧神社へ1週間おまいりした。太鼓と鉦を叩きながら、「雨たーぼいぼい、ぼじゃんじゃっこじゃんとぶっちゃけ」と唱えながら祈った。

年によって異なるが、中居宮司さんにご祈祷していただくと、不思議にも御利益があり、早い場合にはその夜かあくる日、遅くとも4，5日後には雨が降ったと伝えられている。このような雨乞い祭りは各集落ごとに行われ、旱魃時になるとあちこちで太鼓や鉦の音が夜遅くまで夏の夜空に響いたという。（※3）』

※引用3 『愛知川水利史』 p.177

▲黒川の太鼓踊り（甲賀市）［『滋賀文化のススメ』より転載］

（参考）
西尾寿一（1988）『鈴鹿山地の雨乞―湖東・養老をふくめて―』p.9-11, 17-19, 京都山の会出版局
琵琶湖流域研究会編（2003）『琵琶湖流域を読む 下―多様な河川世界へのガイドブック―』p.224-246, サンライズ出版
愛知川水利史編集委員会編（1992）『愛知川水利史』p.177, 愛知川沿岸土地改良区

◆郷祭

「郷祭」とは、中世の郷村間で共同して祭事に当たる祭礼のことです。水田耕作にまつわる郷祭について、湖東平野を例に見ていきます。

鯰江郷の春日祭

東近江市の愛知川右岸、愛東町妹（いもと）町に位置する春日神社では、三月の第二土曜、日曜日に、周辺四町（曽根町、妹町、中戸（なかと）町、鯰江（なまずえ）町）が集まって、春日祭（通称ユキカキ祭）が行われます。四町は、一部町をまたぎながら、六つの「講」というグループに分かれ、祭りに参加します。

講　名	所在地区		戸　数	宮入順
大神社（おおじんじゃ）講	曽根町		約５軒	1
弁水（べんすい）講		妹町	約40軒	2
星生（ほっしょう）講			約20軒	5
袴部（かんべ）講			約80軒	3
田楽（でんがく）講	鯰江町		約60軒	4
新幣（しんぺい）講	中戸町		約40軒	6

▲各講の構成［『愛東の歴史』より転載］

祭りの準備

かつては準備作業や「シュウシ」という酒の座は、各講で決められる「トウニン」と呼ばれる当番宅にて行われていました。現在は、各町の公民館で行われています。準備作業は、公民館の座敷に接して作られる入り口状の垣根（ショウジニワ）を結う「カキユイ」という作業から始まります。祭日の前々日の夜には、神職が公民館を順番に回って「当屋清め」を行い、公民館に神が宿る準備を整えます。

▲カキユイ作業［『愛東の歴史』より転載］

祭りの前日

祭りの前日は「ヨミヤ」と呼ばれ、準備作業は一層慌ただしくなってきます。

まず、「ユキカキ」と呼ばれる板御幣（いたごへい）を春日神社から各公民館へ迎え、ユキカキの飾り付けと、特別なお供え物の作成作業（モノモリ）を行います。お供え物は「ゴクサン」と呼ばれ、「小さく切った餅、干柿、栗をそれぞれ竹串に刺し、芝を詰めて刈り込んだ桶にさし込んだ」ものです。さらに、公民館前やトウニン宅に竹が二本立てられ、しめ縄が張られます。

以上の準備を終えると、シュウシが始まります。講によって多少異なりますが、およそ年齢順に並んで着座し、儀式に則って順番に汁椀で酒を飲みます。二時間半ほどかけて儀式を終えると、その後は無礼講と称して、座を崩し、夕方まで酒を酌み交わします。

夜になると、宵宮巡拝と称し、神職が順に公民館のユキカキを参ります。この夜は、トウニンは神灯の番として公民館に泊まり込み、いよいよ日曜日を迎えます。

▲ヨミヤのシュウシ［『愛東の歴史』より転載］

祭りの当日

祭り当日の朝は、正装で公民館に集合し、立ち祝いとして酒を飲んでいる間、子どもたちは各町ごとにみこしを担いで練り歩き、公民館に立ち寄ります。

正午を過ぎると、各講ごとに春日神社へのユキカキ奉還を行います。先頭は子ども神輿で、その後ユキカキを持ったトウニンらが決まった順番で行列します。春日神社の前の参道に差し掛かると、他の講と合流し、決まった順番で本殿へと向かいます。

▲ショウジニワ［『愛東の歴史』より転載］

▲ユキカキ［『愛東の歴史』より転載］

▲ユキカキ奉還［『愛東の歴史』より転載］

本殿では神事を行い、その後境内で講ごとに分かれて二時間ほどシュウシを行い、翌年のトウニンへの引き継ぎ儀礼を済ませ、この日の祭礼は終了となります。

祭りの翌日には、各トウニンと氏子総代、自治会長が春日神社に参集し、ゴエンと称される祭を無事終えた旨の神事が執り行われます。その後神職らを交えた会食をもって、すべての行事が終了となります。

▲破れた陣幕から見たシュウシ
［『愛東の歴史』より転載］

祭りと水利との関係

春日祭を行う4町は、愛知川上流右岸側の鯰江井（なまずえゆ）と呼ばれる井堰を取水源としていました。鯰江井はかなり古くから開削されていたようで、伝承では8世紀の開削といわれています。

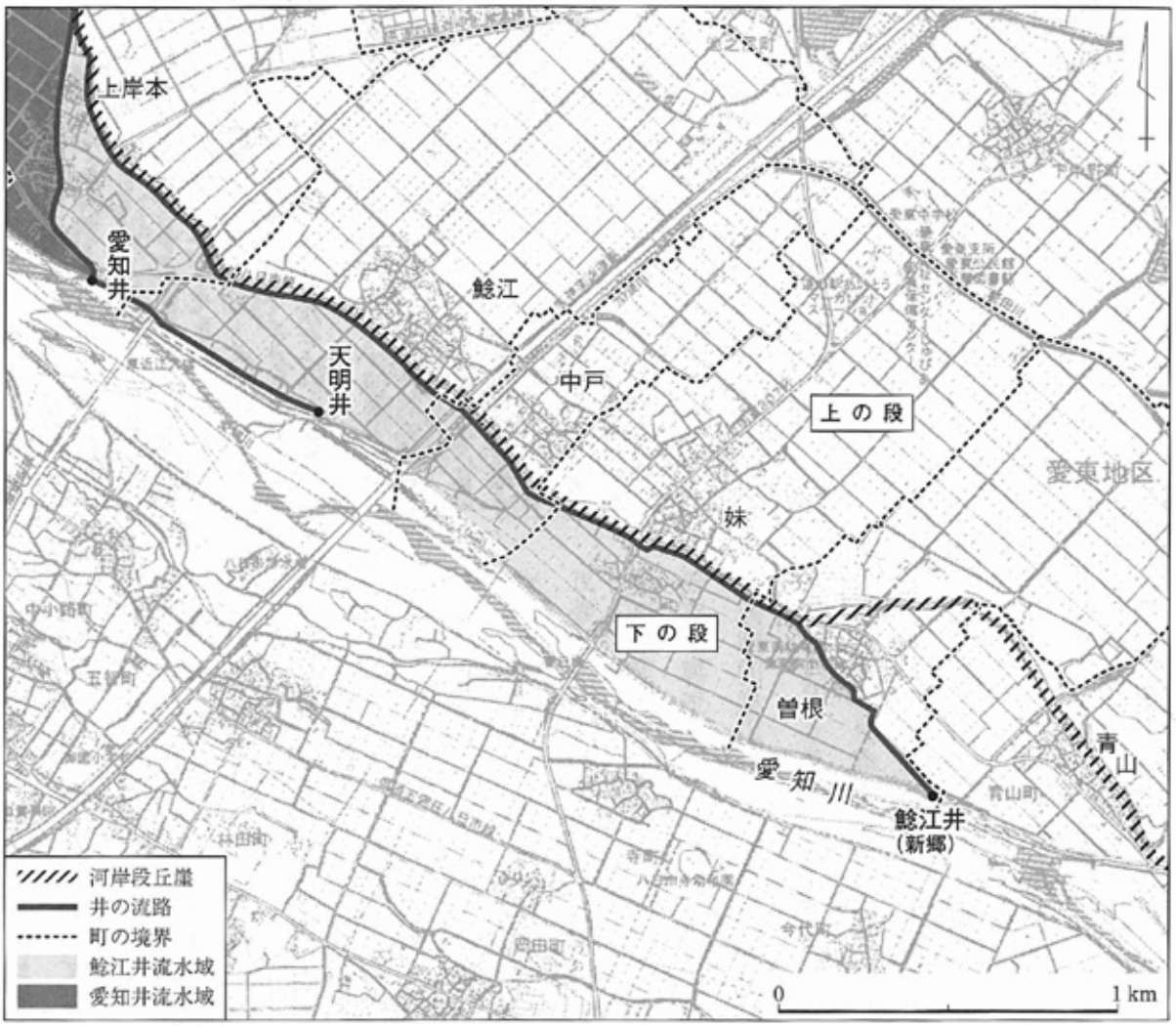
鯰江井は、愛知川の対岸側と取水をめぐる争いを繰り返しており、1827年には、『日照りの際、愛知川北岸の青山井（あおやまゆ）、鯰江井、愛知井（えちゆ）の用水掛かりの村々が結託し「壱万三千ばかり」の人数が集合、川向いの高井（たかゆ）の石垣を壊して「高井切」を行った（※1）』という記録が残っています。

※引用1 『東近江市史愛東の歴史 第3巻』p.476

一方、井郷内での水争いは少なかったようで、対岸との厳密な慣行水利に対して、4町は同じ水を利用する井郷として、協力関係を育んでいたようです。

現在の祭礼は、一見すると水利と関係がないように見える儀礼が行われますが、その祭礼圏は、中世から続く共同体が拠り所としていた鯰江井の水利用圏と一致しています。農作業での水利用が始まる春に向けて、水利の連帯関係を確認する場にもなっていたことがうかがわれます。

（参考）
東近江市史愛東の歴史編集委員会編（2010）『東近江市史愛東の歴史 第3巻』p.450-478, 東近江市
中島誠一・上田洋平・原田信男（2008）『オコナイ―湖国・祭りのかたち―』p.26-33 INAX出版



▲愛知川と井の分布［『愛東の歴史』より転載］